

宗教心理学から見た教化の一考察

——慰霊行動とそれに関わる意識について——

津幡 法胤

I 問題提起・目的

「日本人は無宗教」とよく言われるが、日本人の宗教行動と宗教意識を世界と比較すると日本人の宗教性は非常に特徴的である。電通総研・リサーチセンター編（二〇〇四）の調査によれば、神の存在・死後の世界に対する見方において、日本人だけが「存在する」、「存在しない」、「わからない」という設問に対して同じ程度の比率であり、「わからない」の比率が五十五ヶ国中、一番多かった。また、石井（二〇一〇）も「日本人の宗教のあり方が諸外国と比較して述べられるときには必ずと言っていいほど、宗教意識は三十%と低い、初詣やお彼岸の実施率は八割ほどと高く、十分に宗教的であると指摘される」と述べている。つまり、日本人は宗教行動はよく行っているけれども、その宗教意識は非常に曖昧であるという特徴がある。

戦後すぐの時期と比べると現在の宗教意識と宗教行動は大きく変化している。石井（二〇一〇）によれば、いくつかの世論調査から、「信仰あり」「宗教は大切」という人の減少と高齢者の宗教性の低下、宗教団体への批判的態度の増加、個人的な宗教性の拡大が特徴としてあげられると述べている。つまり、戦後六十年で日本人の宗教意識は大きく変化し、現在もゆっくりと変化していることが示唆されている。

現在、世間では「三離れ(墓、葬式、寺)」や「墓じまい」など日本人の宗教意識について大きく騒がれているが、これらの宗教意識や死生観に関する研究は少ない。また今日、宗門教師において実践布教が叫ばれ、教化学の必要性が問われているが、教化の現場に於いては、未だにそのノウハウが確立されていない。加えて、研究も教化する側からのアプローチが多く見られるが、教化される側の宗教意識に関するアプローチは少ない。

そこで、今回、私が二〇一二年度に執筆した研究論文「慰霊行動とそれに関わる意識についての研究」のアンケート調査と、近年実施された世論調査を元に、日本人の宗教行動と宗教意識の変化を時代差、年代差、性差の比較を通して見ることによって、布教教化の有り様を考察する。なお、ここでは慰霊行動とは墓参り行動と家庭祭壇へのお参り行動を総称したものであり、家庭祭壇とは仏壇や神棚を含めて家の中にある弔う場のことと定義する。

II 慰霊行動とそれに関わる意識

この研究論文は高齢者(一三七名)と大学生(一七一名)を対象に行ったアンケート調査である。質問項目は六つのカテゴリーで構成された。(一、対象者属性、二、慰霊行動及びその意識について、三、死後に対する考えについて、四、葬式について、五、自分が亡くなったあとのことについて、六、人生の満足度)。ここでは全ての結果を掲載することはできない為、全体の結論だけ述べる。

慰霊行動と意識との関係について、慰霊行動と関連が見られた項目は高齢者の「自分が亡くなったあとのくらい墓参りもしくは家庭祭壇のお参りに来て欲しいか」のみであり、その他の意識との関連は見られなかった。つまり、慰霊行動と死後についての考えは直接的に関係がないことが示唆された。また、「墓参りをしたとき自分や家族のことを報告する」「墓参りをしたとき必ず亡くなった人のことを想い浮かべる」「家庭祭壇にお参りする(祈る)とき、亡くなった人に(心のなかで)声をかける」「家庭祭壇にお参りする(祈る)と、亡くなった人が喜んでくれている

と思う」の項目では大学生と高齢者ともに七割〜八割以上が「はい」と回答した。つまり、年齢に関係なく、慰霊行動の際には誰かを思い浮かべていることが分かった。

これらの結果から、なぜ慰霊行動と意識に関連が見られなかったのかについて考察する。これについて、Jesse（二〇一二）は心理学の面からなぜ人は死後の世界を考えるのかについて「心の理論」で説明している。「心の理論」とは相手の心の中を推察する能力である。例えば、自分が図書館にいて、座って本を読んでいる人を見れば、自分は「ああ、あの人は本を読んでいるのだな」と推察することである。これは一般的に三歳〜五歳の間に急速に発達する能力であり、私たちは普段何気なく使っている能力である。つまり、この「心の理論」によって私たちは誰かが亡くなったあとも慰霊行動の際に、自然に誰かを思い浮かべて、自然に死者とのコミュニケーションをとれるわけである。そして、この能力が日本人の高い実施率である募参り行動を支えていると考えられる。つまり、慰霊行動という誰かを申う行動は人間の「本能的に近い行動」であり、今後も消えることはないと考えられる。しかし、近年の募参れの問題があるように、行動自体は消えないが、どのように申うかという「形」は時代によって変化するものである。

次に、慰霊行動と関連が見られなかった死後に対する考えの項目について見てみる。尚、考察部分は本研究に私に与えられた文字数のため割愛する。「魂の有無」の項目のみ年齢と性別による違いは見られなかったが、「生まれ変わり」、「死後の世界」「たたり」の項目において、高齢者より大学生の方が信じている人が多く、男性より女性の方が信じている人が多い傾向だった。ただ、「虫の知らせ」の項目は他の項目と異なる結果を示した。高齢者より大学生の方が信じている人が多く、男性より女性の方が信じている人が多い傾向は一緒であるが、高齢者も信じている人が多いという結果だった。よって、死後に対する考えは高齢者よりも若者、男性より女性の方が「ある」と思っている人が多く、年齢や性別によって異なることを示唆する。

Ⅲ 現代日本人の宗教行動と宗教意識（概観）

では、日本人の宗教行動と宗教意識は発達によってどのように変化するのだろうか。金児（二〇一一）は今から二十年前の論文で日本人の宗教行動と宗教意識の年齢による変化について発表した。それによれば、慰霊的行動（Ex.墓参りをしている）と自己修養的行動（Ex.ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている）は年齢が上がるにつれて増えていくが、現世利益的行動（Ex.この一〜二年の間に、おみくじを引いたり、易や占いをしてもらったことがある）は逆に減っていく、五十歳ごろになるとこれらの行動は大きく変化すると述べている。また、宗教意識においても、向宗教性（Ex.信仰をもつこと）によって、人生の目標が与えられる」と加護観念（Ex.祖先崇拜は美しい風習である）は年齢が高くなるにつれて増加し、それに対して靈魂観念（Ex.死後の世界はあると思う）は年齢が高くなるにつれて減少し、これも五十歳ごろになると大きく変化すると述べている。これが、日本人の宗教行動と宗教意識の概観であり、二十年近くたった今でもこのように変化する傾向があることが支持されている。

Ⅳ 現代日本人の宗教意識（年代差・性差）

さらに、日本人の宗教意識が異なる若者と高齢者並びに男性と女性で見てみる。若者の場合、NHK放送文化研究所（二〇〇九a、二〇〇九b）から、「宗教を信じる」人や「宗教」を重要視する人は少ない。また、内閣府（二〇一四）より日本人の若者は七ヶ国の中で宗教が日々の暮らしのなかで心の支えになると考えている割合は最下位（一八・四％）であった。一方でNHK放送文化研究所（二〇〇九a、二〇〇九b）や社会実情データ図録（二〇一五）から、「あの世・奇跡・お守り」「祖先の霊的な力」はあると思う人が多く、この傾向は特に二十代から四十代の女性に顕著である。

高齢者の場合、NHK放送文化研究所（二〇〇九a、二〇〇九b）から、「宗教を信じる」人や「宗教」を重要視する人は多い。一方でNHK放送文化研究所（二〇〇九a、二〇〇九b）や社会実情データ図録（二〇一五）から「あの世・奇跡・お守り」「祖先の霊的な力」があると考えている人は少なく、この傾向は特に六十代以上の男性に顕著である。

つまり、若者は宗教を信じたり、重要視していないのに「霊」や「あの世」といったものは信じている一方で、高齢者はふだんからお参りはしているけれども「霊」や「あの世」といったものは信じていない傾向があることが分かる。また、若者のうち二十代～四十代の女性は「霊」や「あの世」を信じる傾向が強く、高齢者のうち六十代以上の男性はそれらを信じない傾向が強い。これらの傾向は先述した修士論文の結果でも同じような結果である。つまり、日本人の宗教意識は年齢や性別によって大きく異なるわけである。

V 現代日本人の宗教意識（時代差）

今度は日本人の宗教意識を時代差で見してみる。今の二〇一〇年代にはどんな特徴があるのだろうか。統計数理研究所（二〇一四）やNHK放送文化研究所（二〇一四、二〇〇九a）より、「あの世・来世」は「ある」と回答する人は年々増加している傾向である。また、藤山（二〇一四）は宗教記事データベースから「死後の世界」のトレンドをまとめると、二〇〇七年から現在は「近しい死者が生き続ける死後の世界」と特徴づけて、一九八五年から一九九五年にかけて起こった死後の世界ブームを再び訪れることを示唆している。さらに朝日新聞全国世論調査詳報（二〇一〇）の調査によれば「死」というものは家庭でもタブーと考えられがちであるが、一般的な「死」について話すことに抵抗ないと回答した人は七五％であり、自分の理想的な死や具体的な死でなければ抵抗はないと思っている人が多いことが伺える。これらの結果から、二〇〇〇年代に比べて二〇一〇年代は「死後の世界」などの「見えない世界」

の関心が増加する傾向にあることが予想される。これに加え、NHK文化放送研究所（二〇〇九 a）より、日本人の宗教行動は自己修養的行動よりも現世利益的行動を行う人が全体的に年々増えていることも特徴的である。

この傾向の中で宗教は一般的にどう見られているのだろうか。統計数理研究所の「国民性の調査」において「宗教か科学か」では「人間の救いには科学の進歩と宗教の力とが、たすけあつてゆくことが必要である」と回答した人は五割ほどで一九五三年から二〇一三年までほとんど変化がない。また、「科学が進歩しても、宗教の力でも、人間は救われるものではない」と回答した人は八%（一九五三年）から三十二%（二〇一三年）に増加した。つまり、これを見るとこれは宗教も科学もたしかに大事であると考える人も多いけれども、宗教でも科学でもないという半信半疑な状態である一般人の姿が見て取れる。一方で、W i l f i など見えない科学技術の進歩によって「世の中には見えないけれどもたしかに存在しているものがある」という事実は一般の人により身近な世の中になり、宗教の教えが見直されやすい時代でもある。

N H K 放送文化研究所（二〇〇九 a）によれば、一九九八年に比べて、「仏教に対する親しみ」では親しみがあると回答した人は四九%〜六五%に増加しており、「宗教を信仰している人」も一六歳から三九歳までの年齢層の女性の間で約十%ほど増加した。たしかにご朱印ブームでお寺に来られる方も若い女性が一人でくる場合も多い。つまり、「三離れ」の問題で見ると「宗教」は確かに暗いニュースが多いが、こうした宗教意識そのものを見ると、二〇〇〇年代に比べて二〇一〇年代は仏教にも明るい兆しが見られる。こうした微かではあるがこの追い風の中で、いかに未信徒を教化できるのが今後の課題であろう。

VI おとめ

今回は現代人の宗教行動と宗教意識について、筆者の研究論文といくつかの世論調査を元に、現代人の宗教意識の

時代別、年代別、性別の変化について簡単にまとめ、布教教化のあり方を考察した。「宗教意識」を簡単に見ただけでも年代や性別によって違いがあり、変化があることが分かったのではないだろうか。では、これらのデータから布教教化のあり方について最後にまとめる。

「三離れ」という問題の中で、伝統仏教が置かれている状況はたしかに厳しい。しかし、NHK放送文化研究所（二〇〇九a）より一九九八年と二〇〇八年を比較すると、全年代ともに「死後の世界」はやや増加している傾向や藤山（二〇一四）は一九八五年から一九九五年にかけて起こった死後の世界ブームが再び訪れることを示唆していることなどから、二〇〇〇年代に比べて二〇一〇年代は「死後の世界」、「見えない世界」、「宗教の教え」などの関心が増えていく傾向がある。さらに、その中で年代差で見ると、高齢者に比べて若者が、男性より女性の方が「見えない世界」を信じてる傾向が強く、特に二十代〜四十代の女性がこの傾向が強い。そして、彼女たちの方が「宗教の教え」や「仏教」に対して好感度を持っている人の割合が多い。これらのことから、この二十代から四十代の女性たちのニーズに対してどう援助できるのがこれからの未信徒教化の課題であろう。

また、「死後の世界」に対する考えは比較的早い時期から必要になる。「心の理論」の発達から見れば、三〜五歳の幼児期には「心の理論」によって死の概念が分かり始め、徐々に発達していくわけである。そして、特に中学生の時期には自己概念に大きな混乱が起こる時期であり、このときに霊や死後の世界といったものに興味が起きやすい時期でもある。つまり、比較的早い発達段階から私たちは「死」と向き合うための知識を求められるが、学校教育では「死」について教えないし、地域のお年寄りなどが教えることもなくなつたわけであり、そうした知識を自然に大人が子どもに伝えるしくみは崩壊している。だからこそ、「死後の世界」など「見えない世界」については宗教者が話すべきことであり、宗教者の強みである。

たしかに、統計数理研究所（二〇一四）の「宗教か科学か」で宗教も科学も大切な時代と考える一方で、「宗教」

にも「科学」にも期待していない人は増えている現状がある。また、若者の「伝統仏教」に対する抵抗感が強いことも周知の事実である。しかし、それは現代人が「宗教はよく知らない。けれど、何か悪いもの」という外面を見ているだけであり、この現代人の「宗教に対する無知」に対して、私たちはどのように一般の人に「宗教を知ってもらおうか」が一番大事なわけである。

布教していく上でただがむしやらに布教をするのではなく、相手を知り、相手が何を求めているのかを知ることが非常に重要なことである。こうした研究の研鑽は私たちの布教教化という「旅路」において「地図」となって道を指し示してくれることは間違いないだろう。「一般の人たちが何を考え、何を求めているのか。そして、私たちはそのニーズに対してうまく援助ができているのか」。そうした視点がこれからの教化学に必要なであろう。

〈引用文献〉

朝日新聞全国世論調査詳報(二〇一〇年九〜一〇月郵送調査(日本人の死生観) Journalism 二四八 八四頁〜一〇七頁

石井研士(二〇一〇) データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版 明光社

電通総研・リサーチセンター編(二〇〇四) 世界六〇ヶ国価値観データブック 同友館

藤山みどり(二〇一四) 死後の世界(一) 現代日本のトレンドと報道 www.circam.jp/reports/02/detail?id=5077 二〇一四年八月九日

Jesse Bering (著) 鈴木光太郎 (訳) (二〇一〇) ヒトはなぜ神を信じるのか―信仰する本能― (株)科学同人

金児暁嗣 (監修) 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良 (編集) (二〇一〇) 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版

内閣府(二〇一四) 平成二十五年我々が国と諸外国の若者の意識に関する調査 六月

NHK放送文化研究所(二〇一四) 第九回「日本人の意識」調査(二〇一三) 結果の概要

NHK放送文化研究所（二〇〇九a）宗教的なものにひかれる日本人 ISSP 国際比較調査（宗教）から 調査報告書
二〇〇九年五月

NHK放送文化研究所（二〇〇九b）日本人の意識変化の三五五年の軌跡¹

統計数理研究所（二〇一四）「日本人の国民性調査」 <http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/index.htm> 二〇一四年十二月

社会実情データ図録（二〇一五） <http://www2.ttcn.ac.jp/honkawa/9530.html> 二〇一五年一月一日